

# 歴史上の非道を語り、告発する 冴えた言葉の威力。

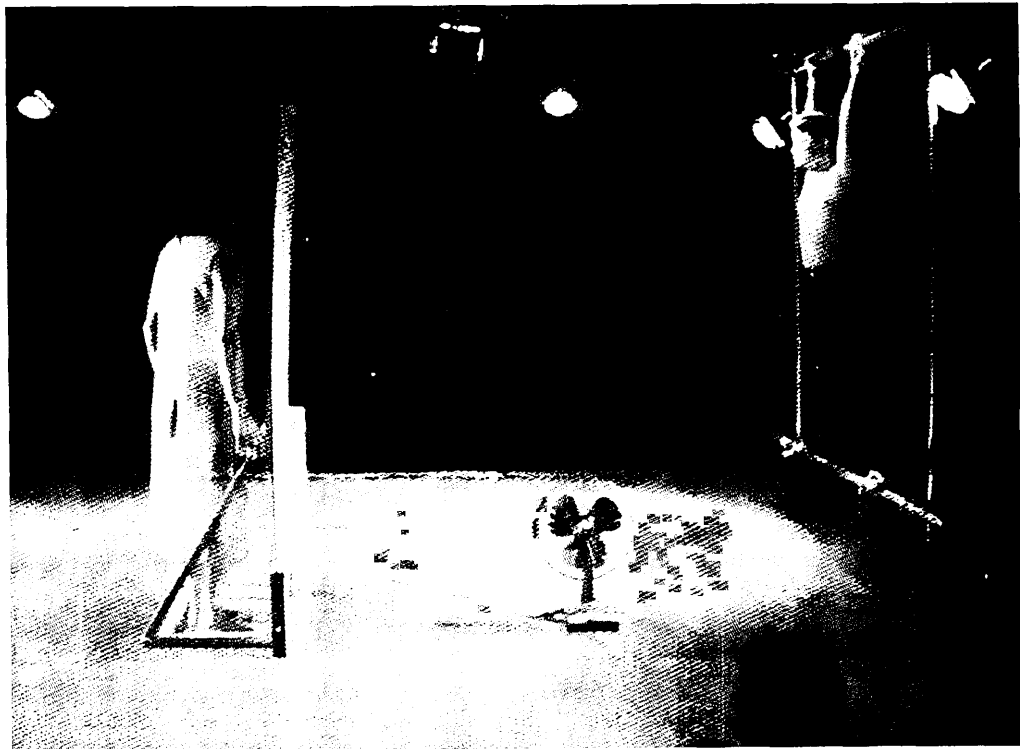
カノコ公演 「破れた希望/ステーション」  
2005年9月2日・3日「カンバス」(御茶ノ水)にて

Asia meets Asia 2005 は、いよいよ開催。  
アジアの記憶が互いの声や身体を通して  
響き合う。キルギスタン、カンボジアなど  
13地域からの観客を迎え、待望の第5  
回 Asia meets Asia 2005 が始まる  
2005年10月17日～23日 会場 麻布  
die prätze(公演)/プロトシアター シンポ  
ジウム フォークショップ 庶As a meets Asia  
実行委員会 03-3360-6463  
mail: ama1997@rinity.com

戦争や自然災害、犯罪の無惨な映像を目にして、なにか決定的なことを見てしまったという感情を持つ人は少なくないだろう。それをきっかけに生々しい感情が湧き上がるのを覚え、日々の生活が今までとは違った感情のもとに見えてくる。行動力のある人なら、ボランティア活動に参加するなり、単独で現場に行ってみるなり、なんらかの行動を起こすかもしれない。しかし決定的なことを見てしまったと感じたアーティストは、「見てしまった」後の相貌を変えた日常に言葉を与え、その表現を通して多くの人々と結びつくことをめざす。彼らの態度は一見行動からは遠く離れているが、決して高踏的ではなく、むしろ現実への応答を性急に求める私たちの心を戒め、重層的な省察へ導ききっかけを与えてくれる。

カノコの公演「破れた希望 ステーション」はそのすぐれた例だ。狭い舞台には、黒スポンをはいた上半身裸の二人の男がいる。ここではなにも起こらないが、にもかかわらず出来事的生々しい感情が喚起される。上手には2mを超える鉄パイプの枠が小さな黒い箱の上に組まれている。一人の男(戸田裕太)が高く掲げた両手と広げた両足を枠の上下の鉄パイプに縛られ、殉教者のように身を晒している。もう一人の男(佐藤信光)は舞台中央に横座りの姿勢で座り、広い背中を鉄パイプに縛られた男に向けている。

この舞台の主演は言葉だ。鉄パイプに縛られた戸田は、言葉を語り出す。たとえばジョン・ダワーの「敗北を抱きしめて」のなかの、特殊慰安施設協会(Recreation and Amusement Association、略してRAA)を描く一節が強い語調で語られる。敗戦直後の日本が占領軍の米兵のために大森に設立した慰安所 RAA には、主として水商売の経験のない女性たちが応募したが、自殺したり、精神状態がおかしくなったり、逃亡する女性も出たという。戸田の口から語り出されるダワーの文章は佐藤の裸の背中にぶつ



カノコ

かり、あたかも言葉の描く悲しさが佐藤の背中を傷つけてしまうかのようだ。しばらくすると佐藤は立ち上がり、舞台奥に移動して女性の衣装に着替え、放心したように壁にもたれるのである。

言葉を発する戸田自身、加害者の立場にはいない。彼は両手両足を縛られており、いわば磔刑直前の苦しみとその場で耐えている。その姿勢のまま、国連大学前で座り込みを続けていたクルド難民一家を訪れた体験を語り、広河隆一「ハレスチナ」などからの文章を、力強く語っていく。もちろん観客には、語り出される内容をその場で聞き取るべく集中力が要求される。しかし両手両足を縛られて動けない戸田と、時

折思い出したように言葉少なに語りだす佐藤とを目の前にしたとき、観客の感性は深く揺さぶられる。戸田の縛られた姿勢は終演まで解かれることはない。

映像や書物を通して流通している膨大な情報を選び分け、たった二人だけの舞台にのせている。舞台では現実の情景が再現されることはないが、舞台に立つ座る横たわる縛られている二人の姿を通して、様々な加害・被害関係が舞台に呼び込まれる。この社会に存在する加害・被害関係を、舞台表現の特権において集約していると言えるだろう。舞台上で語り出される多くの人々と、表現を通して結びつく可能性が示されていた。  
新野守広(演劇評論)

## INTOWN

### 家族の行方

●8月某日 映画「空中庭園」試写に行く。かつて第4山の手ともて囃された多摩ニュータウンに暮らす家族の崩壊劇。崩壊劇というもふさわしくない。高校生の兄と中学生の妹と40歳の父と30代後半の母が、全くてんでバラバラな価値観で生きており、共有される価値観、行為の結節点というものがない。そういう状況がときに楽観的なまでに喜劇的に描かれる。劇場では昨今、強大な父権と追従的な母、立身出世主義や拝金主義、つまりは明治以来の家族制度を無批判にぞる現代劇が散見されるだけに、アナーキーなまでに家族を解体するこの映画の視点には注目したいし、それがおそらく現実なのだ。ラブホテルの原色模様の内装や、権力関係の不在を示す家族の円形のダイニングテーブルなどに、新しい家族劇の感性を感じた。縁側に向けてカメラをおくだけで家族劇の完璧な装置が撮れた成瀬巳喜男の時代の日本家屋も、家屋とともにあった家族制度も、とくに過去のものなのだ。豊田利見監督の映像作家的な力量がディテールを破綻なく埋めている。甘いエンディングも実験として見れば心地良い。小泉今日子は名演。原作



空中庭園

は角田光代。10月公開必見(井上)。  
●8月30日 舞踏青龍會 群舞「進り水」~ die prätze dance festival ダンスが見たい!7 批評家推薦シリーズ~神楽坂 die prätze 雑音まじりのラジオの音のような声か、花が咲いていたと繰り返すなか、5人の少女がけだるそうに体を微動させ、ゆっくり体を振じれらせていく。虚空を凝視する瞳に宿る、深い失意。世の残酷と非道に押しつぶされた花、か。そのはかなさが美しい。やがて主宰の原田伸雄が、かつて所属した大使館を彷彿とさせる

白くて分厚いイブニングドレスのような衣装で登場。原田が若い男に食らいつき、歯形をたて、貪って感極まる狂気のクライマックスまでがスローモーションで進行していく。集中して緊張する原田の身体を中心に、悲劇の気配が濃度を上げていくの見えるようだ。あるいは、空気の固まりのような悲劇的緊張がそこに現われるとでも言おうか。その迫力にボカンとやられる気分。余談だが、トヨタコレオグラフィアワードを受賞するダンサーたちに、しばしば、身体の迫力というものがない。ただ踊りの真似事に過ぎないものにまで、毎年、賞を与えているように思える。無教養である。8月29日、30日に開催(井上)。



舞踏青龍會 撮影/田中英世

# 歌に踊りの芸達者衆が、捨て身の気迫で観客を熱狂させる ダメ恋愛検証オムニバス。ビンタ、足蹴りもものは、よ!

仏団観音びらき「女殺駄目男地獄 (オンナゴロシダメンスジゴク)」  
9月12日(月)~14日(水) タイニイアリス Alice Festival 2005



かねがね面白いとは聞いていたが、ほんとに愉しく面白かった。2回見たうちのとくに初日。ハイテンションの舞台に客席にはつねに笑い声が起り、カーテンコールを促す盛んな拍手で終わった。人気劇団になる日はもうすぐそこだ、と思った。

なぜそんなに面白かったか、理由はまだよくわからない。あるいは、一人ひとりがまるで流し目の小芝居みたいに「魅せる」、いわゆる芸達者だったから、かも知れない。が、どうもそれだけではないようだ。その底に、捨て身の気迫が籠もっていたから、ではないだろうか——? 女の尻股びろげ、男の文字通りの素っ裸や、こちらが思わぬ!と声を上げそうなビンタや足蹴りやすってんころりなど、いたるところに出てくるが、別にそれらを恋々と思え場なんかにしてるわけじゃない。必要だからそうするのであり、すぐ次に思いがけない

笑いや歌やダンスのシーンがやってくるから、役者はただその瞬間その瞬間に全身を投棄するのだ。あとでちょっと話しかけてみた役者さんたちはやっぱり、みんな想像以上の恥ずかしがり屋さんばかりだったから、それはおそらく、「必死」という言葉を使ってもいいほどの作業だったにちがいない。

物語はいたって簡単。真夜中三時の「ダメ恋愛検証」TV番組。その中に、もと外資系会社の社長、三つ股かけるダメ男に尽くして尽くして尽くし果て、ついに梅毒で死ぬパーのホステス(峰U子)。初体験な上に男の自虐につい同情、母子にまわりつかれてカードローン地獄、とうとう九十九里浜で溺死させられるOL(ゆであずき)。貯金と節約が生きがいのケチケチ婚約者に我慢できず、白馬の王子か宇宙人を夢見てヤクの運び人にされ、果ては内臓えぐられゴミ集積所

に遺棄されてしまう専業主婦キャンディデイト(本木香吏/作・演出も)——3人のダメ女の再現フィルムが放映されるという仕組み。テレビ番組だから、もちろん間にCMも入るし、ゲストも招かれてくるし、全体を仕切るコメンテーターと司会もいる。引越センターのCM・エリート夫婦を嫉視して布団干しを叩きに叩く奈良の引越おばさん(松岡里花)には笑いに笑ったし、「現実を直視せよ!」などとしたり顔で警告を発していたコメンテーターや司会者も実は男に金をせびられたり暴力を振るわれていたというオチも、常套といえば常套だが、作のうまさと言えよう。

2時間を越す大作。なかにもうちょっと切り詰めたほうが……?というシーンがなかったというと嘘になるが、体の動く役者は身体を生かし、イケメンはただ顔を生かすといった思い切った配役。全体は、どうして僕らは出会ってしまったのだろうから、あなたと会ったそのときから恋の奴隷となりました。あなた好みの女になりたい」まで、歌と踊りで綴ったミュージカルともいえそうな構成。シーン、シーンのスピーディなアツと言場のつなぎ方。演出の技量も並みではない。

配られた配役表に本木香吏の「ご挨拶」があって、そのなかにトリニダードパコ共和国とかのダメ男に関わった昔の自分の「暴露話」が記されていた。真の笑いは10倍も20倍もの誇張の底に自分の痛みが横たわっていてこそ、であろう。女はなぜダメ男に入れあげてしまうのだろうか? それはただダメ女の「心理」のせい、なのだろうか? 次作への期待は大きい。

西村博子



撮影/青木 司(2点とも)

## INTOWN

●8月31日 金沢舞踏館& Theater ASOU「カフカ変身」~die prätze dance festival ダンスが見たい!7/インターナショナル ダンス コラボレーション~麻布die prätze 公演は30日、31日

グレゴール・ザムザのおかれた都市の監獄的現実を、金沢舞踏館の2人とオーストリアのTheater ASOUのメンバー5人が描き出す。Theater ASOUの洗練された動きに驚く。4~5人がより集まって陽炎のように体を揺らしたり、虫のように腰をくねらせて床を這うパフォーマンスから、相互監視、陰口の応酬、監禁といった状況とその薄ら寒い閉塞感がよく伝わってくる。蜘蛛のように両手を逆手にくねらせて客席に襲いかかるように威嚇するところは、大駱駝艦のようだった。白人の舞踏はしばしば体の形

態をなぞるだけで内発性に欠けるが、Theater ASOUのメンバーは、摺り足や中腰も不自然ではない。演出の山本萌の指導の巧みさゆえだろう。世界各国の白人舞踏のなかで、そうとう高水準の成果と言えるのではないかと。Theater ASOUはグラーツ(GRAZ)に本拠をおき、ベルリン在住の吉岡由美子(ミゼール花岡)さんや金沢舞踏館のワークショップに参加し、共同作業を重ねているようだ。金沢舞踏館は02年

から毎夏、グラーツのダンスフェスティバルでワークショップと公演を行っている。さらにTheater ASOUは基本トレーニングとしてインドの武道であるカラリヤパツツも習得しているという。世界各地の表現を獲得しようとする意欲に脱帽。「die prätze dance festival ダンスが見たい!7」も終了。回を重ねてセレクションがますます充実してきたようで、どのプログラムも観客を引き込む内容を供えていた。次回も楽しみだ。(井上)。

## 戦争とは何だったのか 「暁をみずに」ステファン・ハヴェリャーナ著 阪谷芳直訳 勁草書房

1945の沖縄戦で、沖縄の民間人を日本軍が殺したという事件の報告は31件以上にのぼり、深い心の傷に今も苦しむ人々がいる。日本軍とは本質的にそういう狂った軍隊だった。そのことへの決着も今だにないまま、再び軍隊を持つとする勢力が、改憲を叫んでいる。フィリピンではマカピリと呼ばれる対日協力者と抗日運動を戦った人々の間に、今だに深刻な溝が横たわっている。フィリピンでの日本軍の残虐さまるる蛮行は、例えば、フィリピン人法律家ハヴェリャーナが1947年にボストンで出版した「暁を見ずに」に(勁草書房)に詳しい。これらの歴史的蛮行がなかったかのように振る舞う幼鬼的な自己愛の持ち主たちが、憲法改悪を叫んでいる。そして、状況はその集団的狂気に浸食されつつある。憲法改悪に反対して、今、表現者にできることをしよう!



ASOU 撮影/田中英世

「暁をみずに」は、第二次世界大戦の終結後、沖縄に上陸した日本軍の残虐な行状を、著者が現地取材を通じて知り、その惨状を伝えるための書物である。著者は、沖縄戦で犠牲になった民間人の数や、日本軍の残虐な行状について、具体的な事例を挙げながら、読者に伝える。また、著者は、沖縄戦の背景や、日本軍の残虐な行状の原因についても、詳しく解説している。この書は、戦争の残酷さを伝えるだけでなく、戦争の背景や、日本軍の残虐な行状の原因についても、詳しく解説している。この書は、戦争の残酷さを伝えるだけでなく、戦争の背景や、日本軍の残虐な行状の原因についても、詳しく解説している。

# まだ見ぬ"オルタナティブな"方向へ。 実験的な音響表現が聴き手を挑発する。

特集  
東京芸術見本市  
2005

東京芸術見本市2005 ショーケース  
9月12～15日  
◎丸ビルホール／東京国際フォーラム

4日間にわたって行われた東京芸術見本市 (TPAM) 2005 は、従来の演劇／ダンスのプログラムに加え、音楽にもスポットをあてた内容となった。音楽を取り上げるに至った経緯については次ページの主催者からのコメント記事を参照して頂くこととして、ここでは特に「New sonic performance」 Altervision05-Avant music night! 「Different music(s)/Tokyo next texture!」と題された3つのショーケースを取り上げ、そこに出演したアーティスト達がどのような視点で新しい音楽表現にアプローチしていたのかをレポートしてみたい。\*文中の番号は写真の番号と一致しています

## ■「音響」への様々なアプローチ

「New sonic…」と「Altervision…」に出演したアーティスト達に共通するのは「音響」という概念への意識だ。近年「音響派」などとカテゴライズされる音楽も多く登場し注目されているが、この場合の音響とは、人工的に「作曲」される以前の素材としての「音そのもの」という意味だけでなく、その音が鳴らされる環境との関係、さらにそれをどのように聴くのか、といった「聴くこと」との関係までを含んだ問題意識も含まれている。

## 〈制作楽器の使用〉

新しい音響を得るために、まず考えられるのは新しい楽器を作ってしまうということだ。伊東篤宏による「optron」は蛍光灯が発光する際に生じる放電ノイズを増幅させ音を出すもので、その非音楽的な爆音は音楽、少なくとも「まともな音楽」を演奏することを前提に作られていない。今回の optron とドラムによるユニット「optron (①)」の演奏は、その変則的な編成から予想がつくように、メロディやハーモニーといった要素を完全に無視した驚きに満ちたものであった。柳澤真梨奈 (②) は、透明なアクリルパイプの中に仕掛けられたマイクとスピーカーをハウリングさせることによって音を発生させる自作楽器「ハウリン」を演奏。その不思議な持続音を有効に使った深い響きの音楽を披露した。この2組に共通するのは、新しい音素材の可能性を探った結果、独自の音楽に辿り着いている点だ。音楽において新しい音素材の獲得は、ただ目新しさをもたらすだけのものではなく、演奏や作曲に対する根本的な意識にまで変化を及ぼす、大きな革命なのである。

## 〈サウンドアートのアプローチ〉

堀尾寛太 (③) は電磁石の磁力をコントロールし、電磁石の下に置かれた10数個のゼムクリップを付着・剥離することで生じる音をマイクで拾い、その音を使って「演奏」を披露した。ハチバチという残響の少ない物質的な音の新鮮ささめることながら、スクリーンに映し出されるクリップの映像もインパクトがあった。

角田俊也 (④) は机の上に並べたPCのファン等の音源の周りをマイクでなぞり、場所によって複数の音源が干渉したり、変化したりする様子をプレゼンテーション。音がどのように空間に存在しているのかを記述してみせた。恩田晃 (⑤) はカセットテープに録った環境音を会場で再生、時折テープを変え、音にエフェクトをかけたたり、早送り (あるいは巻き戻し) などの操作を行い、ここではないどこか別の時空を想起させるようなパフォーマンスを行った。これらの表現は単に音を聴いて楽しむというだけではなく、そのコンセプト、行為、そして音という要素が一体になって成立する、いわゆるサウンドアートの表現だ。ドラびでお (⑥) は、叩くことによって映像を様々な変容させることが出来るようにプログラムされた、特殊なドラムセットによる演奏を披露。これもメディアアートの一種だといえるが、ドラムを叩くことで、「ピアノを弾いている映像」を操作する等、出てくる表現はナンセンスかつ下世話なもの。しかしこのアナーキーで奔放な創造力は実に魅力的だ。

## 〈能動的に聴くこと〉

エレキギター一本による即興演奏を行った秋山徹次 (⑦) の演奏は、一聴すると何の変哲もないブルース・ブギーのようであるが、その延々くり返されるフレーズに意識を集中させると、音の重なり、ずれ等、そこに驚くほど豊かな構造があるのに気がつく。これは差し出された音響から、聴く側が構造を聴き出さなければ成立しない表現なのである。澤井妙治 (⑧) はオ

●9月13日「東京芸術見本市2005」の「舞台芸術のための著作権」(於 東京国際フォーラム会議室) というセミナーに行く。「見本市」はショーケースという考え方で、舞台芸術を国内外の劇場関係者にプロモーションする。最近美術界で「アートフェア東京」という、美術の見本市のようなものが行われたが、作品展示と売買に過ぎなかった。その点、「見本市」にはセミナーもあり、嬉しく有意義。「著作権」という言葉は知っていても、ひとつの作品の何をもって、どこまでを「著作権」とするのか。実際の弁護士がレクチャーしてくれた。面白かったのは「似ているもの」の事例とし

て手塚治虫の「ジャングル大帝」とティズニー映画「ライオンキング」の実際の映像を比較し、違いや類似点を教えてくれたこと。「著作権」の考え方が具体的に判った (藤田千彩)

●9月15日「見本市」で見た二つめのセミナーは「美術館におけるパフォーマンスの可能性」(於 東京国際フォーラム会議室) である。広島市現代美術館、金沢21世紀美術館、国際芸術センター青森といった、比較的現代美術を扱い、美術という枠の中でパフォーマンスを紹介する美術館の事例を紹介する。現場の学芸員が成果や問題点を報告した。聞いていて「(現

代) 美術」とは「あらゆることを表現する。ジャンルだ」という気がしてきた。だから美術館でパフォーマンスはアリなのだ、と実感。いずれのセミナーも満席で、舞台関係者たちの関心の高さが伺えた。14日の「公立文化施設はどう変わる!？」というセミナーにも行った。これはタイトルの通り、指定管理者制度や市町村合併に揺れる美術館やホールの担当者、大学教授や企業メセナ担当者などによるトークであった。関係者共通の問題を考え、新鮮な知識を吸収する場としてセミナーは有効だ。(CUT IN 美術担当 藤田千彩)

●9月16日 劇団アランサムセ「アベ博士の心電図」～タイニイアリス・フェスティバル2005～ 1990年に大阪で起きた、朝鮮高校バレー部インターハイ出場辞退事件。女子部員たちが出場を前提に特訓を行っていたが、結局はバレーボール連盟によって排除され、青春の汗と夢が汚泥にまみれた。この出来事のような朝鮮人差別の歴史、記憶を抹殺しようと目論む狂気の脳科学者アベ博士が舞



セミナー「美術館におけるパフォーマンスの可能性」



**音楽に焦点を当てたショーケース  
談/丸岡ひろみ**

東京芸術見本 (TPAM) 2005事務局  
副事務局長/プログラムディレクター

—今回、ショーケースで音楽に焦点をあてた理由とは何ですか。

◆主に二つあります。舞台芸術の見本市は世界各地にあります。規模、成果ともに最も成功しているのは欧州の WOMEX、NY の APAP と思われ。前者は完全に「ワールド」ミュージックの見本市だし、後者は全ジャンルを網羅しつつも出展の7割以上が音楽です。にもかかわらず TPAM は音楽に殆ど触れてこなかった。10回を機に、本格的に取り組みました。これが一つ目の理由です。

もう一つは、この厳しい時代を迎えつつある今、「同時代」性ではもはや人々に訴えかけるのは難しい。芸術の本質はファッションでも消費でもないという事を、明確にする必要があると思いました。

—そのために、何故、音楽が?

◆これは、私が2003年9月から大統領選挙直前の2004年8月までNYに一年滞在した体験から学んだ事です。NYは世界の一都市に過ぎませんが、9・11前後の、被害者であり加害者でもある渦中の都市の舞台芸術はどうなっているか、そのある「一端」に触れる事が出来たと思います。滞在中、多くの舞台芸術(演劇・ダンス・音楽)に触れる機会がありましたが、世界に直面するような発言を、曖昧さなくはつきり行っていたのは音楽だけでした。もちろん演劇もダンスも、真面目に発言しようとするものは多かったのですが、「華氏911」程度にしか言明できない。一方音楽家は、これはジャズ、ヒップホップ、現代音楽の、主に60歳を過ぎた人々ですが、決然と自分の意見を「訴え」ました。例えば、ジム・ホールというギタリストはヴィレッジ・ヴァンガードやブルーノートといった、ある種の観光地のジャズクラブでのお決まりのライブの後でさえ「選挙に行け」と発言し、その訴えは、彼の演奏と何ら矛盾しない事がその聴衆にも理解できる。

—音楽家達の発言と演奏が主張として一致する状況がある、と。

◆これが例えば、演劇やダンスのカーテンコールなら、ある一定以上に用意された演出やレトリックがなければ、とても難しいだろうと思いました。ここで重要なのは、音楽というものが持つ構造です。歴史的、社会的、個人的、理論的、感情的な矛盾や両義性を同時に取り込みつつ瞬時に表現に昇華し得るような「音楽」に焦点を当てる事が、その構造を明確にする方法の一つとなりうるかも知れないと考えました。これが二つ目の理由です。

TPAMは文字通り「見本市」であり、多くの人々に潜在している表現を顕在化してゆく事が使命だと思っています。もちろん、二つ目の理由としてお話しした内容が音楽にしか出来ないと思っている訳ではありませんし、今後はジャンルを問わずその使命を具現する方法を探りながら運営したいと思っています。

シレーター(一定の周波数を発生する機械)とコンピュータを使い、大音量による演奏を行った。高音が鼓膜を激しく刺激し、低音のビートが胸のあたりにズンズンと打ち付けられるような激しい音響に、音の本質が「振動」であることを再認識させられる。この耳を覆いたくなるような音も、積極的に聴くならば快感になる。この2組に共通するのは音に対して聴き手の能動的な参加を求めているという点だろう。

**■作曲へのアプローチ**

「Different music(s)/Tokyo next texture」に出演したアーティスト達が意識的に試みたのは、音響という「素材」ではなく、その素材をいかに組み合わせるか、つまり「作曲(composition)」へのアプローチであった。降神(origami) (◎)はDJ 1人にMC 2人というオーソドックスな編成のヒップホップユニットだが、リリック(ラップの詞)における言葉の選び方、

組み合わせの仕方がユニーク。奇妙にねじれた世界観を語る日本語は、過剰なまでに韻を踏み、予想外の語のつながりで聞き手のイメージを刺激する。黒人音楽のスタイルの真似ではない、オルタナティブな(もう一つの)ヒップホップ表現だ。sim(シム) (◎)はジャズ、ロック、ファンク等の作曲言語を分析、解体し、コンピュータによる音響とドラム、ギターによって独自に再構成してみた。即興か、もしくは間違いなのではないかと不安になるほど大胆な変拍子が、何度も正確に繰り返される曲展開は実に斬新。gnu(ヌー) (◎)は楽器編成としても新しい音響装置は一切使わず、音楽的にも一聴すると普通の洗練されたジャズ・フュージョンのようにも聴こえるが、リズムやフレーズ展開の節々に理知的で緻密な構造と、構造美のようなものが開き出せる。この3組に共通するのはある既存の音楽の要素を一度客観的に捉え直し、それらを新しく再構築していくというアプローチだ。

**■まとめ**

3つのショーケースはそれぞれ違ったディレクターによって出演者が選ばれていた。しかしすべてに共通項があるとしたら、それは既存の表現ではなく、何かオルタナティブなもの、もう一つ別の可能性に向かっているということだろう。その方法をまとめるならば、使い慣れた作曲語法や素材を捨てること、あるいは新しい視点からそれらを見直すということではなかったかと思う。また、今回のようなショーケースはただの音楽好きよりも、むしろ音楽に特に関心の無い人が見た方が色々発見があったのではないか。何故なら出演者自身が音楽という活動領域から一歩逸れ、何か別の方向を模索しているからだ。ディレクターの一人が「音楽」ではなく「音を使った表現」と作品を紹介していたのが印象的だった。3日間通いつめた私は、正直言って疲れも覚えた。出演者の多彩な実験に聴き手も試されていたのだ。(小笠原幸介)



撮影/宮内勝

台上に登場。また、この騒動をめくってインターハイへの出場そのものを屈従と見なす世代と、日本社会に自由に活躍の場を求めようとする若い世代が登場し、対立を深める。バレーボール部のコーチは、自分が憎み恨んで来た国の選手権のために愛する生徒をしごけるか、と言って退部。しかし生徒たちの夢はインターハイ出場であり、そのためには彼らを憎むべき国へ解き放つてやるしかない。この残酷な現実。当方にそういう体験はないが、サングラスを外さないこのコーチの思いは胸に迫り、泣けた。記憶喪失の医学的説明をいきなりラップでやり出すタタハタ風ギャグは楽しく、

切実な真情溢れる長台詞は心に染みる。終盤では安部、森、石原らの戦争賛美の言説を黒板に張り出し、糾弾する。「安部! ただじゃおかねえぞ」と役者に叫ばせたつかこうへいの「熱海殺人事件 金ジョニル暗殺せよ」と同じようにして、吹き出す怒りだ。

●9月某日 写真集「ourface 日本に暮らす様々な人々3141人を重ねた肖像」(窓社新刊)を見る。不思議な感じの肖像写真だ。40~50人の集団の一人一人の肖像画を一枚の印画紙に重ね焼きすると、このように中央に輪郭のぼやけた「顔」が浮き上がる。写真家、北野謙のourface シリーズ。1999年から、北野はいわゆる集団と名指し得る人々のところに通えるかぎり通い、59枚つまり59集団のourfaceを製作した。それが、この一冊に。熊野の火祭りの男衆、沖縄の市場のお女将さん達、原宿の女の子、客室乗務員。出来上がったのは59枚だが、実際に撮影したのは3141人、1枚に平均52人の顔が入っている。さらに1ページ目には全部を重ねた1枚が掲げられている。これはいったい何だ? 見てみると、どこか意識の深層を覗いたような、自分の中の何かがこれらの写真に溶

けだているような気がして来る。写真家は彼らと彼自身に共通する、共同主観のようなものを探求しているのだ。少なくとも、この社会の個人と個人の分断状況を越えようとする、その創造的な勇気が嬉しいではないか。書店でぜひ見てほしい。(井上)



劇団アランサムエ



左)…長崎県多良見町立琴梅中学校の生徒(男子)59人を重ねた肖像  
右)…原宿にきている少女たち65人を重ねた肖像

# Alice Festival 2005 (8月11日～2006年2月19日) 開催中。10月からの注目のプログラム。

## 必殺の小ネタ満載! 夢の島の住人が 繰りひろげる社会派メルヘン。

アトリエサンクス(大阪)「ベターランド2」  
◎10/14(金)～16(日)

テンポの良い演出と本格的なダンス、ここぞという時に決める必殺の「小ネタ」を武器に観客を釘付けにしてきた「踊る演劇小ネタ集団」アトリエサンクス。その最新作は、歌とダンス、そして得意の小ネタをふんだんに取り入れてのミュージカル仕立て!? 左手をフライパンにかえた「クック」、キュートなおっさんみたいな妖精「インク」。どこかで聞いたことがあるような人々が住んでいるネバーランド…いや、「ベターランド」。

大人になったかつての少年と住人たちが繰り広げると、ことんハカハカしい「ドタバタ社会派メルヘン」!

の中に潜む罪)は、女性らしい自己追跡の旅。無声映画式に自分と対話する。「悪戯」はサルトルの「出口なし」(1943)の私的受とともいえる作品。ゴシックのようなヒステリー、嬰兒殺し、乱倫、同性愛—その発生とともに温度はぐんぐん上がっていく。台北と東京、両サイドからの視点を透明にしたい—その思いからアリスフェスティバルに初登場。



## 「本物」に真正面からとり組む 演劇集団が、芝居の底力を見せつける。

E.G.WORLD III(東京)「強い者イジメ～それ  
でいいの? これでもいいの?～」  
◎11/4(金)～6(日)

金堂修一が主宰する演劇集団E.G.WORLDは、芝居の力を信じ、プレッシャー・コンプレックス・ディスコミュニケーションをテーマに、メンバーのベストキャラ、ベストプレイを探索中。もっとヘヴィに! もっとハードに! もっとディープに! 本物(存在感のある役者)になりたいメンバーと本物(存在感のある芝居)を創造すべく、ゼロから挑戦中。ギリシャ悲劇とシェーク

## アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場 TINY ALICE より最新ニュース

スピアとイブセンと三好十郎と、ジョン・カサベテスとケン・ローチとラース・フォン・トリアのファンは必見。E.G.WORLDは小劇場演劇ではない。インディーズ演劇である。虐げられた者たちの想いを、祈りをこめて—

## 無意識の世界を実験的な手法で舞台化。 想像力を刺激する斬新な演出に注目。

釜山演劇制作所ドニョック(釜山)  
「愛、初めてのイメージ—夢」  
◎11/8(火)～10(木)

1995年、慶星大学演劇専攻の卒業生たちが創立した「テアトル 慶星」を母体に発足。専攻を問わず門戸を開放し、つねに若い思考を求め、固定化と停滞を拒否してきた。今回上演するのはオ・チウンの作・演出による実験的な作品。1年間のイメージワークショップによって「夢」という無意識の空間を発見、完璧な愛への欲望を描く。東洋と西洋の夢占で使われる象徴的な記号や韓国舞踊、禅武道の採用も清新で、2000年釜山演劇祭の演出賞と戯曲賞を受賞。ソウル実験演劇のフリンジ演劇祭へも招かれた注目作。



## 台北から飛び出した新しい才能。 独自の視点と感性で描かれた2作品。

無夢楼 Dreamless Theatre(台北)  
・「姦視」◎11/1(火)&2(水)  
・「悪戯」◎12/20(火)&21(水)

台北の女性演出家第3世代のホープC.Janがタイニアリスに飛び込んできた! 「姦視」(左)の虹彩

## 女性作家たちが競演する異色の美術展、開催。

LUNEプロデュース NEO ART展 11/3(木・祝)～11/23(水・祝)  
@神楽坂die pratze 問=03-3235-7990(神楽坂die pratze)

・第一章 11/3(木・祝)～11/9(水)  
TOKTOKSE 小金井ケイコ展 「ヒーリングアートの幻想世界」 ※初日オープニングあります。是非ご参加下さい。  
・第二章 11/10(木)～11/16(水)  
KANTO OROWANO 「ベラドンナの會GIRLS ART展」 創立メンバーによるexhibition 回帰への旅 章はここから始まる…  
・第三章 11/17(木)～11/23(水・祝)  
「第一回公募 ベラドンナの會GIRLS ART展」  
この公募は女性としての内面性を謳うものであり各々の現在を枠にとらわれない作品の可能性を探る解放の場である。



11月3日からのLUNEプロデュースNEO ART展にさきだし、招待作家の画家、成田朱希さんと主催のLUNEさんにお話を伺いました。

●成田さんはLUNEさんをモデルに作品を作っていると伺いましたが、作品にする時のLUNEさんの印象とは?

成田朱希(以下、N)一妖艶で、神秘的。でも実際のLUNEちゃんは気さくで女友達みたいです。

●成田さんとLUNEさんが出会ったきっかけは?

N—2004年、LUNEちゃんの冬の公演に呼んでもらったのがはじまりです。友人の銅版画家、多賀新さんから紹介を受けました。その頃私が一緒にお仕事をしていた作家、山口椿さんがLUNEちゃんときょうえんするということでDMを頂いて、観に行っただけど、最初は「この人とは友達になれない!」と思いました。LUNE(以下、L)—どうして～?

N—舞台上のLUNEちゃんは、人間嫌いなオーラを放っていたので、終演後、挨拶に行こうとしましたが集中していて近寄り難い雰囲気だったので、そのまま帰りました。

L—そんなことないのに～

N—でも後日上野で会って直接お話ししたら、すぐに打ち解けて。誤解を受けやすい人だと思います。そういえば私は今回のNEO ART展の公募、GIRLS ART展にも出品の招待を頂いていますが、そもそもなんでこんな企画をはじめたの?

L—ベラドンナの會が育ってきて、発表の場を持ちたいと思った事と、劇場での絵画展示という可能性に魅かれたので。この21日間の展示は、女性作家の持つ瑞々しい感性を発揮できる場となります。die

## 新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場 DIE PRATZE より最新ニュース

pratzeが違った個性で彩られるこの展示へ、ぜひいらして下さい。

●今回のNEO ART展、平面絵画の域にとどまらず、感性に訴えかける空間ARTのEXHIBITIONです。LUNEさんのプロデュースということで、華やかな展示が期待できそうです! 劇場がどんな表情を見せてくれるのか楽しみです。お見逃しなく! 詳細はこちらからどうぞ。

<http://www.geocities.jp/kanagawaluneclub>

## JOIN IN THE PICNIC 期待の公演情報

◆神楽坂die pratze  
10/28(金)～10/30(日)

劇団てんしのたまご  
「てんしのたまご」  
問=090-2236-0633

◎天使見習いが地上に舞い降りた。  
最終試験は「人を幸せにすること」。  
見習い天使はどんな方法で人を幸せにするのだろうか? あなたが天使だったらどうしますか?



◆麻布die pratze  
11/2(水)～11/6(日)

池の下  
「池の下プロト☆ステージ「病気」」  
問=080-3389-7967(池の下)  
作=別役実 演出=長野和文  
出演=井上美千代 いづみスミオ  
櫻井雄一郎 他

◎「病気」を見て笑える人は幸いなり。  
「病気」を見て泣ける人は幸いなり。現代日本のこわれた関係をすくくスグル、シュールでポップなナンセンスコメディ!





# 演技と演奏が作り出すアンサンブルが、夢と冒険の物語世界に誘う。



## にしすがも創造舎演劇上演プロジェクトvol.1

アートネットワーク・ジャパン+Ort.d.d プロデュース「サーカス物語」

10月7日(金)～10日(月・祝)にしすがも創造舎特設会場 問い合わせ=03-5961-5200

夢と想像力の大切さを歌いあげるエンディングのファンタジーが、(にしすがも創造舎)の体育館特設会場で上演される。傾きかけて立ち退きを迫られるサーカス一座の芸人たちが、空想の中の「明日の国」に乗り込み、悪の支配者アングラミン(巨大毒グモ)と戦う。そのダイナミックな物語の展開にかかせないのが、12人のクロス役の俳優たちによるパーカッション(太鼓、カネ、木琴、笛etc.)の楽器演奏だ。そのディレクションにあたったのが、NEST、Ort.d.dなどで、出演者自身による演奏の方法を模索、構築してきた棚川寛子である。

「稽古場では、シーンにあわせて楽器をあれこれと鳴らしてみる。そうやって音を一つずつ拾い、重ねながら、演奏と芝居をひとつの形にしていきます。出演者たちが場面の意味を考えて演奏するわけですから、これは俳優が台詞を言う行為に近いものだと思っています。芝居づくりに直接絡む、そういう演奏なんです」。クロス役の俳優たちによる演奏は、ときに緊迫感をもって台詞を語る俳優の演技に絡み、ときに大胆に場面を盛り上げる。棚川のリードのもとに演技と演奏が作り出すアンサンブルの妙を、ぜひお楽しみください。

## 芸術文化を支援、発信するNPO アートネットワーク・ジャパンより MONTHLY LETTER Vol.23

自身パフォーマンスも努めながら「芝居に絡む演奏」を追求し続ける棚川寛子。最近ではクナウカの「女王メディア」(2005年7～8月)での演奏を構成。右と一緒にインタビューに答えてくれたアングラミン役の笠木誠。「アングラミンは、世界を破壊し続ける毒グモ。もっともつと破壊したいという欲求にとらわれ、最後は魔法の鏡に映った自分の顔を見て、自分を破壊してしまう。難しい役ですが、夢の国の王子に、愛や自由などというものが本当にあるならそれを証明してみろと詰るべきところには、むしろ現代人に共通する人間っぽさを感じます」。第三エロチカ所属で、川村毅の舞台には欠かせない笠木誠。今回の稽古場では、情熱的に表情豊かに「悪の象徴」を演じていた。本番での熱演に期待しよう。



## 世界と日本をアートでつなぐ東京国際芸術祭(TIF)

2006年2月～3月開催。現代社会を浮き彫りにする作品がアメリカ、イスラエル、クウェート、ドイツ、日本から集結。

TIF国際共同製作事業 アメリカ現代戯曲&劇作家シリーズvol.1「アメリカ」ドラマリーディング

◎にしすがも創造舎 2月9日(木)～12日(日)

- ・「Demonology」作:ケリー・スチュアート
- ・「BELLAGIO」作:マック・ウェルマン
- ・「FACT A LADY」作:ジョーダン・ハンソン
- ・「THE SEX HABITS OF AMERICAN WOMEN」作:ジュリー・マリー・マイアット

ヤスミン・ゴデール and The Bloody Bench Players【イスラエル】

◎にしすがも創造舎 3月1日(水)～4日(土)

「ストロベリークリームと火薬」振付:ヤスミン・ゴデール

TIF国際共同製作事業 スレイマン・アルパッサム・シアターカンパニー【クウェート】

◎にしすがも創造舎 3月11日(土)～16日(木)

世界初演!「カリラ・ワ・ティムナ 王子たちの鏡(英語バージョン)」作・演出:S・アルパッサム

ドイツ座【ドイツ】

◎彩の国さいたま芸術劇場 3月19日(日)～21日(火・祝)

「エミーリア・ガロツティ」原作:レッシング 演出:ミヒャエル・タールハイマー

にしすがも創造舎演劇上演プロジェクトvol.2【日本】

◎にしすがも創造舎 3月19日(日)～21日(火・祝)

「4時48分サイコシ」作:サラ・ケイン 演出:阿部初美 ドラマトゥルグ:長島確 スリーポイント・プロデュース【日本】

◎下北沢「劇」小劇場 3月22日(水)～26日(日)

ベケット・ライブ vol.7「見かぎい言いちがひ」(仮題)

原作:サミュエル・ベケット コンセプト・翻訳:宇野邦一 演出:三浦基 演出:鈴木理江子

にしすがも創造舎演劇上演プロジェクトvol.3【日本】

◎にしすがも創造舎 3月24日(金)～27日(月)

「ガラスの動物園」作:T.ウィリアムズ 演出:倉迫康史

リージョナルシアター・シリーズ

◎東京芸術劇場小ホール1 2月17日(金)～3月5日(日)

2月17日(金)～19日(日)劇団Ugly duckling【大阪】

「改訂版さっちゃん」作:樋口美友喜 演出:池田祐佳理

2月21日(火)～22日(水)劇団現代時報【盛岡】

タイトル未定 作・演出:高村明彦

2月25日(土)～26日(日)SKグループ【札幌】

タイトル未定 作・演出:すがの公

3月3日(金)～5日(日)北九州芸術劇場×飛ぶ劇場【北九州】

「IRON」作・演出:泊篤志

【インターナショナル・ヴィジターズ・プログラム】

◎にしすがも創造舎 3月19日(日)

国際演劇批評家協会シンポジウム

\*公演タイトル・会場・日程は予定

問い合わせ:東京国際芸術祭(TIF)

TEL 03-5961-5202 <http://anj.or.jp>

## schedule for OCTOBER 2005

### TINY ALICE / NPO ARC

新宿区新宿2-13-6 光産ビルB1 tel/fax 03-3354-7307  
<http://www.tinyalice.net> [tokyo@tinyalice.ne.jp](mailto:tokyo@tinyalice.ne.jp)

10/8(木)～10/10(月) ■イケメンアン

「ロンドン」☆www.ikemenian.com

☆作・演出:堀見タカ也 出演:小川真史 入江慶 小野真実 谷真矢 堀見タカ也 近藤玄大 野瀬真史 諷山樹 ◎選挙シーズンというのがあるかどうか。村長が選挙で選ばれるものなのかどうか、マイチわかっていないイケメンアンがアリス初登場。

10/14(金)～16日(日) ■アリエサンクス

「ベターランド」ALICE FES 2005参加

☆http://www.occn.zaq.ne.jp/thanxbox/

☆作・演出:ワタナベアキラ ☆出演:村上泰子 浦川舞奈 橋ユウスケ 村上愛 ワタナベアキラ 他 ◎よりよい世界、よりよい選択を求め、誰もが知っているそんな夢の島があった。そこに一人の「少年」が漂流したどつつき...

10/21(金)～24(月) ■東京ミナラル金魚

「アオイカケラ」☆Tel&Fax:03-5858-2533(オーケー企画) ☆作/演出:守本拓也 ☆出演:藤原大輔 富山勝美 守本拓也 岡村佳子 島之内教雅 石橋秀樹 島田昌寛 斉藤拓真 沖田勇 富田寛幸 藤大輔 ◎運命の玉に翻弄される、さまざまな宿命と直面する若者の夢と勇気の西洋風時代活劇。

10/27(木)～30(日) ■亜細亜象演劇即売市場

「僕たちに恋物語は似合わない」☆Tel:03-5938-0088

☆作:寺師良克 演出:遠藤吉博 ☆出演:中村浩人 寺師良克 島川志乃 加藤栄一郎 小松田あこ 浅見真人 水野里香 高橋亮次 小田公太 ◎ホテルで缶詰になる落ちぶれた恋愛小説家を主人公に、恋のバトルを繰り広げるラブコメディ。

### 神楽坂 die platze

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

9/30(金)～10/2(日) ■劇団X-tension

STAGE:3「さて、ここでクイズです」☆問=070-6464-6661 ☆作=又吉和行 ☆出演=南条結子 相沢二葉 関根大志 他 ◎父の遺産を手に入れるため、実の弟を殺害する決心をした姉。しかしそんな姉の悪感とは裏腹に、予期せぬ殺人が次々と繰り出される迷推理、犯人は一体誰だ?

### 麻布 die platze

〒106-0044 港区麻布1-26-62F T&F03-5545-1386

9/30(金)～10/2(日) ■minatoxflat car

「MINATO×FLAT CAR #003「プラズマ」」☆問=090-6122-6487 ☆作・演出=折笠港 ☆出演=大塚竜也中田大地 向後徳成 渡辺暹与 熊本統樹 他 ◎バス停に集まる人々を軸に、天気、電波、テレビ、家族、遠距離恋愛をモチーフとして、東京タワーのふもと麻布から発信する最新型ラブストーリー。

10/4(火)&10/5(水) ■ST企画

「ダンスミュージカル『The Hand of Destiny ～シンデレラの真実～』」☆問=042-354-6485 ☆作=凡樹 演出=谷口聖一 ☆出演=おおのゆうこ 花田麻由子 中川涼 他◎真実を伝えたい!!! 素直なシンデレラが望んだのは王子様との結婚ではない!!! 迫力あるダンスシーンと感動を伝えます♪

10/8(土)～10/10(祝・月) ■SmokyBubbles

「Forget-me-not」☆問=090-7150-2854 ☆作・演出=J・スモーク ☆出演=山田リョウ 平田剛 笠松美樹 川口愛子 蓮野直哉 他 ◎本格派アクションと熱き芝居を融合した新感覚の舞台。Smoky第5回公演は広大な宇宙空間を舞台に繰り広げられるSFアクションイベント!

10/14(金)～10/16(日) ■MAME-ch(まめチャンネル)

「す・く・ら・ぶ」☆問=070-5012-1492(まめチャンネル) ☆作・演出=平和人 ☆出演=佐々木耕平 狩田直樹 松村慎也 中野裕理 佐藤信也 青木律 他 ◎ある日裏面に隕石が落下した。するとそこには土まじりの少女が...そして彼女がこぼした。「フタンの名前は...ボテ子!」最高にハッピーな物語がこの秋誕生す!

10/19(水)～10/23(日) ■Asia meets Asia

「Vol.5 Asia meets Asia 2005-アジア現代演劇の国際交流活動の創造」☆問=03-3368-0490/E-mail: proto@pop16.odn.ne.jp(プロシアター)

参加劇団:☆Exile Theatre(アフガニスタン)+Bond Street Theatre(アメリカ) ☆Bishkek City Drama Theatre(キルギスタン) ☆Sovanna Phum Company(カンボジア)+Integrated ☆Performing Arts Guild(ミャンマー)+Waterfield Theatre (台湾) ☆Asia meets Asia Collaboration Project No.4 ☆イマーシェオバ(東京)

☆チームタリス(東京) ☆クアトロカスト(東京) ◎第5回となる今年は、アフガニスタン、キルギスタン等、12地域からのグループ・個人迎えます。日本からは、今注目される3劇団が参加。「観るだけでなく、彼らと直交流を!」

10/28(金)～10/30(日) ■As Art Projects

「未来細胞」☆問=090-1736-2619 ☆作・演出=紅麻 ☆振付=asA ◎時は2055年の近未来。主人公達が興味本位である研究所に進入する。そこで彼らが見たものはあまりにも恐ろしい現実。人間とは、生きるとは、自分達は一体何者

11/2(水)～11/6(日) ■池の下

「池の下」プロトシアター「病氣」☆問=080-3389-7967(池の下) ☆作=別役実 ☆演出=長野和文 ☆出演=井上美千代 いづみミオ 櫻井雄一郎 他